

2018年近畿地方（兵庫県）第三章の難問

問23 抗炎症成分に関する記述の正誤のうち、正しい組み合わせはどれか。

- a. セミアルカリプロテイナーゼは、体内で産生される炎症物質を分解する作用がある。
- b. ブロメラインは、炎症が生じた組織において、フィブリン類似の沈着物質を分解し、炎症進出物の排出を促すことで、炎症による腫れを和らげる。
- c. トラネキサム酸は、フィブリノゲンやフィブリンを分解する作用もあり、血液凝固異常のある人では出血傾向を悪化させるおそれがある。
- d. グリチルリチン酸は、大量に摂取すると偽アルドステロン症を生じるおそれがある。

【解説】

- a. ○セミアルカリプロテイナーゼ：リゾチームと同じく「消炎酵素」の仲間。消炎酵素の有効性について議論がなされているため、同成分に対しても風当たりが厳しい。PMDAの添付文書で成分名を検索すると、アルペンゴールドカプセルという一製品のみ出てくる。
- b. ○ブロメライン：「消炎酵素」の仲間。体内で産生される炎症物質を分解する作用があり、鼻粘膜や喉の炎症による腫れを和らげる作用があると言われる。PMDAの添付文書で成分名を検索すると、一製品もヒットしない。
※セミアルカリプロテイナーゼもブロメラインも、フィブリノゲンやフィブリンを分解する作用があり、血液凝固異常のある人では出血傾向を悪化させるおそれがある。
- c. ×トラネキサム酸：凝固した血液を溶解されにくくする働きがあるので、血栓のある人（脳血栓、心筋梗塞、血栓性静脈炎等）や血栓を起こすおそれのある人に使用する場合、注意が必要。
※セトラキサート塩酸塩：胃薬の成分。体内で代謝されてトラネキサム酸を生じるため、血栓のある人は注意。セトラのトラは、トラネキサム酸のトラと覚えよう。
- d. ○グリチルリチン酸：カンゾウに含まれる成分。この通り。

問28 鎮暈薬の有効成分について、正しいものの組み合わせはどれか。

- a. ジフェニドール塩酸塩は、抗ヒスタミン成分ではないため、眠気や口渇などの副作用が現れることはない。
- b. メクリジン塩酸塩は、他の抗ヒスタミン成分と比べて作用が現れるのが遅く持続時間が長いので、専ら鎮暈薬に配合されている。
- c. ジプロフィリンは、脳に軽い興奮を起させて平衡感覚の混乱によるめまいを軽減させることを目的として配合されている場合がある。
- d. ジフェンヒドラミンサリチル酸塩は、外国において乳児突然死症候群などの致命的な

呼吸抑制を生じたとの報告があるため、小児では使用を避ける必要がある。

【解説】

- a. × ジフェニドール塩酸塩について
 - ・ 内耳にある前庭と脳を結ぶ神経（前庭神経）の調節作用のほか、内耳への血流を改善する作用を示す。
 - ・ 日本においては専ら抗めまい成分として用いられている。
 - ・ 抗ヒスタミン成分や抗コリン成分と同様の副作用（頭痛、排尿困難、眠気、散瞳による異常な眩しさ、口渇など）がある
- b. ○
- c. ○ 「～フィリン」はキサンチン誘導体。カフェインや第五章に出てくるテオフィリンも同じグループ。
- d. × 記述は、プロメタジンテオクル酸塩等のプロメタジンを含む成分についてだが、市販薬の添付文書検索ではノーヒットの成分。

問 33 口腔咽喉薬及びうがい薬に配合される生薬成分及び漢方製剤に関する記述について誤っているものはどれか。

- a. ラタニアは、クラメリア・トリアンドラ及びその同属植物の根を起原とする生薬で、咽頭粘膜をひきしめる（収斂）作用により炎症の寛解を促す効果を期待して用いられる。
- b. 駆風解毒散及び駆風解毒湯は、体力に関わらず、喉が晴れて痛む扁桃炎、扁桃周囲炎に適すとされる。
- c. 白虎加人参湯は、虚弱で、熱感と口渇が強いものの喉の渴き、ほてり、湿疹、皮膚炎、皮膚のかゆみに適すとされる。
- d. 響声破笛丸は、体力に関わらず、しわがれ声、咽喉不快に適すとされる。

【解説】

- a. ○
- b. ○
- c. × 試験で出題されるのど症状の漢方で、虚弱の人だけに向けたものはない。例えば、桔梗湯、駆風解毒湯、響声破笛丸は「体力に関わらず」であり、白虎加人参湯は「体力中等度以上」。中国では西の神様が白虎であることから、この漢方の名前がついた。「白虎加人参湯」「五虎湯」など、虎の強そうなイメージで「中等度以上」と覚えよう。ちなみに「人参湯」は虚弱向けである。
- d. ○